

## 進化する祭りと巫集団

## —韓国江陵端午祭の今—

佛敎大学・関西大学非常勤講師 佐藤 文字

## 神にお帰り願うということ

二〇一六年六月十日から十二日の日程で韓国江原道江陵市の江陵端午祭について調査を実施した。江陵端午祭は孟夏に臨んで、江陵市民が郊外二〇キロの大関嶺まで出向き、城隍神および五色に飾った神木に宿らせたもろもろの無主孤魂を自分たちの生活空間に迎え入れ、祭壇に安置し、神前にて豊作豊漁の予祝行事を催し、わざわざいを滅しさきわいを願うという祭りである。

この調査は二〇一五年度からの継続調査で、前回は神迎えの行事を中心に調査を実施した。二〇一六年の祭事は五月十一日（旧暦四月五日）神酒作りから六月十二日の神送りまでの日程で開催された。今回は、祭のクライマックスともいえる神送りの行事を中心に調査するとともに、江陵端午祭の芸能保有者（韓国重要無形文化財第一三号）である金鍾群氏（官奴仮面劇伝習者）・賓順愛氏（巫



写真1 仮面劇伝習者の金鍾群氏、右は手島崇裕氏

儀伝習者）に聞き取り調査を実施することができた。

送神祭は端午祭を見守った神々を江陵市街の外へ送り出す祭で、二〇一六年は六月十二日の夕方六時から行われた。祭壇のまえで儒式の作法で祝文が読み上げられたあと、神牌と神木、灯籠・花蓋・竜船を、巫楽が鳴り響くなか南大川の中洲に



写真2 神牌と神木を南大川の中洲へ

担ぎ出して焼祭が行われた。

大関嶺のある西方へ向かってなんども拝礼しながら祭官が神木に火をかける。燃え上がったとみるや、祭礼の一行は足早にその場を立ち去り、ふりむかずに南岸にもどる。かつては祭官や巫は中洲に着衣を脱ぎ捨てて去ったのだという。

## 未婚女性という属性

送神祭の日は街の人たちにとって長く楽しいイベントの最終日でもある。生活用品や各地の名産品がならぶナンジャン（乱場）とよばれる巨縁日の最終日である。奇品珍品もあるが、韓国ならどこにでも売って



写真4 大関嶺の方角に向かって拝す



写真3 神木に火をかける



写真5 花嫁人形

いるおみやげものを今回初めて意識した。花嫁人形である。花嫁の姿をした人形はさがせば何処の国にもあるのだろうし、日本でも女兒のための雛人形はそのような意味合いが強いものとして発展してきた。しかしそれとはあきらかに違うレベルでごく日用品としてあちこちに売っている。「これは（この習慣は）日本にはない」と言うところと日本留学の経験が長いはずの池美玲氏が大いに驚いていた。日常的すぎる事柄は気づきにくい。ここまではまえふりである。世界遺産となった江陵端午祭の実行委員会は、さまざまなおみやげ物やキャラクターグッズを用意しているが、際だって売れ残ったグッズが

あった。女城隍神、つまり未婚のまま亡くなった鄭氏の娘のぬいぐるみである。女の子には常から花嫁人形を、というのがコモンセンスであるのならこれは確かに型破りである。生者と死者が協同する社会では、女性の不幸の決定において婚家に嫁ぐということは大きい。切実なのは死者になってからで、婚家の子孫によって祀られないかぎり、祖霊としての社会性を獲得できない。

それを逆手に取ると、未婚のまま死んだ女性はそれだけで強力な崇り神になれる。無名であることでその威は勢いを増す。ときに集団が未婚女性を殺すことで神威不在のところにあらたな神威を人為的に現出させることさえできるのである。

### だれが守護神なのか

はなしを巻き戻すようだが、今回の調査でようやく送神祭を見届けることができたことで、ただの歴史家であるわたくしにもおぼろげながら見えてきたことがある。

現在では江陵市民は端午祭開催のために城隍神と女城隍神の二つの神牌を祭壇に安置しているが、大関嶺の山神こそが江陵市街に迎え入れられる祭神であった。江陵市街が発達する過程で、鶴山集落の予祝祭や城

隄神が、江陵端午祭と密接な関わりを持つに至った。李氏朝鮮時代の地方官であった許筠（一五六九～一六一八）の随筆『惺所覆韻藻』によると、宣祖三十六年（一六〇三）の時点で溟州（江陵）のひとつとが迎えていたのは大関嶺の「山神」であったことが明らかである。

祭りがまつりとして機能しているかぎり、ひとびとのくらしとともに変容していくのは当然である。その過程について言及を試みるならば、女城隍神の神影としてお下げ髪の娘が虎とともに描かれているところが大きなヒントであろう。未婚女性の不遇な魂を虎に託して山神に嫁がせ、祭祀することで神格化しているのである。すなわち死者となった鄭氏の娘と結婚したのは鶴山の村人が尊崇する梵日国師ではなく、大関嶺の山神であったのである。

大関嶺の山神に習合している金庾信は統一新羅の英雄であり、強い神威を以て生者たちの信仰をあつめる死者であったが、その信仰がいわゆる日本統治時代に抑圧されたことはよく知られている。おそらくそこで金庾信信仰とともにあった山神は後退し、近郊村落たる鶴山の城隍神がこれに替わったのではないだろうかというのが、わたくしのいまのところの推測である。

現在ともに大関嶺に隣り合って座す山神と城隍神の神前では、神迎えに際して近似した祭儀が取られているが、市民に迎え入れられて端午祭を見守るのは、金庾信が習合した山神ではなく、鶴山を郷里とする梵日国師が習合した城隍神と、江陵の郊外洪濟洞に祀られる女城隍神との二神である。城隍神の立地としては、いま堂がある大関嶺は低い山ではあるが外山であって、堂は嶺を越えた反対側の西斜面にあり、人里からは遠くに過ぎる。

ちなみに、二〇一六年の大関嶺での城隍祭においては、初献官を江陵市長が務め、神前で次のような祝詞を述べ、燃やした。

維 歲次乙未陰四月甲午 朔十五日 戊申 初献官 江陵市長 崔明熙 敢昭告于

大関嶺国師城隍之神

伏惟尊靈 位我重鎮 自麗至今

無替厥煙

凡我有求 禱輒見応 際此孟夏

田事方興

禦災防患 触類降監 若時昭事

敢有不欽

茲遵旧儀 載陳牲璧 神其度斯

庶幾歆格

尚饗

## 巫女の身体

現在巫集団をとりまとめているのは、巫女（ムーダン）で無形文化財芸能保持者賓順愛氏である。巫集団は神降ろしの重要な役目を担う。歌舞を担う巫女と音曲を担う巫楽の担当があり、前者はおもに女性、後者はおもに男性である。巫女たちは「クツ」と呼ばれる唄でひとつの願いを神に伝える。そのうち手練れの者だけが神の言葉を聞くことができ、また身体に自在に神を宿らせるそのコントロールができる。

彼女たちは、神木に霊を集めるときには帽子を被り、神木を祭壇に安置するときには、衣の色を白色に更



写真6 神が降りる賓順愛氏の髷

める。神を宿す巫女は若い巫女とは異なつたうずたかい鬘を結っている。この鬘は日本統治時代には強制的に断髪され、祭りが再開されたとき鬘を失った巫女たちは、鬘を頭に結わえ祭事に臨んだという。江陵端午文化館には、その当時の鬘がいまも保管されており、わたくしはそれをまのあたりに見る事ができた。

憑依により神霊を帯びるタイプの宗教者たちの宗教性は、うずたかい鬘こそをありかとし、唄や踊りや華やかな出で立ちを取る事によってオンの状態となる。神々を鎮めるときには唄や踊りは封じられ、彼女たちの華やかな装束は解かれる。オフの必要があるときには髪は覆い隠される。

彼女たちは神の容れ物としてはまぎれもなく畏の対象ではあるが、生身の人間としては位置づけがない。黒色の袍で身を包むことで世俗身分を標榜する儒儀の祭官らとは、まったく異なる存在として祭りに関わってきたのである。

## 巫集団の挑戦

調査の場面においてもそれは随所に感じられた。たとえば祭儀が終了するたびに共食が催されるが、祭壇のまえの共食の座に着くのは儒式の

祭儀を行う祭官たち（黒色の袍）と、保存会会長である。「官奴仮面劇」の伝習者である現在の保存会会長は、無位をあらわす生成の麻衣を着けてその座の末席にいる。二年連続参加という意味で希少な日本人研究者であるわたくしは、その座に加えられる乳酸発酵の神酒を注がれた（これは残さずに飲み干さなければならぬいよ。」と保存会長に教えられた。しかしそこには祭りの花形であるムダンらの席はない。

現在巫集団は、色衣を解いたときにも、白衣に小さな刺繍を施して完全に白くなるのを避けている。伝統色に無いピンク色の衣を使っている場面もあった。そのわけについて以下私見を述べる。祭壇の方ではなく観客の方を向いて唄う彼女たちは、現在、神の側に立つのか人の側に立つのかあるいはもっぱら仲介役であるのかは、きわめて微妙な問題である。神をその身体に宿らせて強力を発揮したり、神との対話の仲介を務め神意を伝える場面もあるが、今となつては彼女たちが祭りのあいだじゅう人から神への願いを歌い舞いづけるクツこそが、江陵端午祭そのものであるといつても過言ではない。

たとえば竜王クツでは、巫女たちは、セウオル号やチョナン号の沈没



写真7 ひとびとの願いを歌う

によって生者の世界に戻れなくなり、遺体さえ戻らないために、いまだ死者となることもできない若者たちの魂が（このところは、死者となる手続きが節略された日本社会の住人にはわかりづらい）、家族のもとに戻れるようにと竜王に願った。（竜王はその聞き届けのしるしとして、巫女の「雨よ降れ！」という言葉に応えた。ピンポイント天気予報も捨てたものではないと本気で思った。）

巫集団の現在の立場は、伝統的な区別にどこかで現代の女性差別が融合したようにも見受けられる。また巫集団に付属する巫楽師らは、かつての「貧者」の芸能者の技を受け継

ぐ者であることから、さらに影の存在たることを強いられている。

この現状に対し、後継者の育成に力を入れる寶順愛氏は、あらたな挑戦をしている。唄（クツ）の歌い手に巫楽師の少年を入れたのである。これは伝統的なやりかたではないという批判もあることであろう。しかしまたやはり祭りは生き物なのである。世界遺産という肩書きを得て守られるべき芸能という側面を持つことになった江陵端午祭は、転換の時期を迎えている。わたくしにはその変化の瞬間に立ち会えたことこそが、なにか貴重なことであるようにも感じられた。

以上、江陵端午祭については二度



写真8 少年の歌舞を見守る

にわたる調査によって、さまざまな知見を得ることができたが、ここでは簡単な素描にとどめ、今後の継続調査を期しつつひとまず略報告としておきたい。



写真9 祭りのおわり

### 【附記】

今回の調査にあたっては、江陵端午祭保存会および実行委員会の皆様のご協力をうけた。記して謝意を申し上げる次第である。また事前調査・随行・通訳・撮影補助において共同研究者池美玲氏・手島崇裕氏の全面協力を受けた。なおこの研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C) (16K02222)「日本とアジアの

魂魄観についての比較思想的研究  
— 災気と人神の関係から考える —  
研究代表者・佐藤文子) による成果の一部である。